

■ ヨハクの近況報告

先月の「月刊ヨハク（10月号）」は、少しお休みをいただきました。というのも、10月から11月にかけて、学会や講演に呼んでいただく機会が続き、気づけば荷造りや原稿チェックに追われる1ヶ月となりました。

10月11日・12日には、北海道帯広市「とかちプラザ」で開催された第68回日本病院・地域精神医学会において、法人として2題の一般演題を発表しました。

・有村 慧「希望を地域につなぐ ～本人主体の地域移行支援～」

・戸田 竜也「精神科措置入院と記録へのアクセス：情報開示請求の実践から見た二重被害」

また、戸田は学会内の理事会企画・交流企画にも登壇し、身体拘束や地域生活支援をめぐる議論に参加しました。

続いて、11月9日には、精神科病院の職員で構成される全国精神医療労働組合協議会（全国精労協）の記念講演にて、「地域移行支援」をテーマにお話ししました。ハイブリッド形式で行われ、病院職員・地域支援者の方々が地域での暮らしをどう支えていくかについて意見を交わしました。

学会や講演を通じて、ヨハクの実践を広く発信し、地域での暮らしを支える取り組みをより深めていく機会となりました。



■ 医学書院『精神看護』11月号に、ヨハクのスタッフが登場！

医療専門誌『精神看護』（医学書院）2025年11月号の特集は、「減薬をめぐる現実」。この号では、ヨハクの戸田竜也と松本葉子さんも執筆しています。



松本葉子さんは「薬によらない精神科医療を求めて」と題し、薬との向き合い方について語っています。戸田は「薬に見る断絶——地域の声と精神科医療」という文章で、地域で支援に関わる立場から、薬の使われ方が人とのつながりにどんな影響を与えているのかを考えました。

それぞれの立場から語られる“減薬”の現実と希望を、ぜひ手に取って読んでみてください。

（ヨハク事務所にも見本誌があります。気になる方はお気軽にどうぞ。）